

1. 単元名(主題) 「専門的課題研究における各自の研究活動」

～中間計画発表会に向けた見通しと、リサーチクエスションの深化～

2. 本時の主題の概要および設定理由

本時は、1年半にわたる専門的課題研究の第1段階(最初の3分の1)の節目となる、学年末実施の「専門的課題研究中間発表会」に向けた極めて重要な位置づけにある。

生徒はこれまで、各自の興味・関心に基づいて研究チームを編成し、先行研究の調査等を通じて漠然とした「問い」を立ててきた。本時では、まず中間発表会の意義(研究の途中経過の自己点検、およびプレゼンテーションスキルの向上)を理解させ、どのようなスライド構成で発表を行うべきかの全体像を明示する。これにより、今後の研究プロセスの具体的な見通しを持たせる。

また、冬期休暇中に課される「生成AIを活用した学術論文の検索と概要理解」という課題を示す。これは、年明け以降に研究計画の論理性を補強するための極めて重要な先行研究調査プロセスとなる。

本時のコアとなる時間(40分間)は、教員によるチームごとの個別面談とファシリテーションを中心とし、生徒たちが「リサーチクエスション(RQ)の多面的検証」と「仮説・検証方法の具体化」を『探究ノート』や『研究計画書』に整理することを目指す。単なる調べ学習で終わる問いを排除し、学術的な意義と検証可能性を備えた「問い」へと発展させる協働活動を支援するために、本主題を設定した。

3. 本時の目標

- 1) **中間発表会と冬期課題への見通し(計画性):** 中間発表会の重点目標(自己点検と発表スキル向上)および評価ルーブリック(SSコンピテンシー準拠)を理解し、冬休みの課題(生成AIを用いた学術論文検索)の目的を把握して、今後の活動計画を立てることができる。
- 2) **リサーチクエスションの多面的検証と仮説立案(課題発見・論理的思考):** 先行研究調査をふまえ、言葉の定義の明確化や「いつ・どこで・だれが」等の多面的な検証を行い、解決すべき本質的な「リサーチクエスション」を導出し、それに対する「確からしい仮説」と「検証方法」を論理的に整理することができる。
- 3) **対話を通じた協働的改善(協働性・客観性):** チーム内での合意形成および教員との個別面談を通じ、研究計画の実現可能性や論理性について他者からのフィードバックを主体的に取り入れ、計画書をブラッシュアップさせることができる。

4. 本時の準備・使用教材

- 教員用提示資料: 『SS I 総探-第22回スライド』
- 使用教材(副教材): 『課題研究メソッド 2nd Edition』(岡本 尚也/新興出版社啓林館/2021)
- 生徒用ワークシート: 『探究ノート』
- 共同編集用ファイル: 『研究計画書兼報告書』
- 教員用管理資料: 『教室別名票』(各教室の担当教員に配布)、『HR別名票』
- 共有用デジタルファイル: 『専門的課題研究チーム編成表』(各教室用シート)

- 共通参照資料: 『高1 SSI 学習の手引き』

5. 本時の展開(50分)

時間	学習活動	指導上の留意点・教員の支援
2分	(1) 出席確認と授業環境の確認 ● 学問分野ごとに指定された教室に入室し、出席確認を受ける。座席は自由とする。 ● 個人端末の準備を整え、Google Classroomから『第22回授業スライド(PDF版)』を表示する。	● ホームルーム別の出席確認を効率的に行う。 ● 座席は自由とするが、出欠の不一致がないよう名票と照合する。
5分	(2) 中間計画発表会の概要説明 ● 学年末に実施される「専門的課題研究中間発表会」の目的(研究計画の途中経過の自己点検、発表スキルの向上)を把握する。 ● 発表会におけるスライドの基本構成(タイトル、背景、リサーチクエスチョン、仮説と検証方法、計4枚以上)や、相互評価による評価(SSコンピテンシーに基づくルーブリック評価)の基準を確認し、発表までの大まかなスケジュールを見通す。	● 提示資料(スライドp.2-6)を投影し、中間発表会が今年度の課題研究の集大成かつ次年度の外部発表に向けたステップとなることを説明する。 ● 発表技術(聞き手に興味を持たせ、論理的に考えを伝えるプレゼンテーション)の重要性を説き、単なる「スライド作成」にとどまらない総合的な表現力の向上を促す。
1分	(3) 冬期課題(生成AIを活用した論文検索・要約)の説明確認 ● 冬休み課題解説スライドをもとに、生成AI(PerplexityおよびNotebookLM)を用いた学術論文検索、要約、共有のプロセスを理解する。 ● Perplexityによる信頼できる情報源(学術領域)の選択方法、およびNotebookLMへのアップロードと要約プロセスの流れを把握する。 ● Perplexityの「スペース機能」を活用し、チーム内でAIの出力結果やスレッドを共同共有する方法、解説動画の存在を確認する。	● 生成AIを「答えの出力ツール」としてではなく、「先行研究を効率的に探索し、深い専門的理解を助ける支援ツール」として適切に利用するよう、情報倫理とAIの正しい位置づけについて指導する。 ● 事前に配信されたマニュアルスライドおよび動画へのアクセス方法を指示し、冬期休業中に生徒が自己解決できる環境を提供する。
23分	(4) チーム(個別)課題探究ワークの実践 ● 『探究ノート』を開き、「①本日の予定・目標」を記述する。 ● 各チームで、これまでの先行研究の調査をふまえて「問い」から「リサーチクエスチョン(RQ)」への深化・具体化を図る。 ● リサーチクエスチョンに対し、明らかになっている事実(先行研究)に基づいた「仮説」を立て、その仮説を検証するための「適切な研究・調査方法」を検討する。 ● 検討内容を『探究ノート』の活動記録およびチームの『研究計画書』の所定箇所に共同編集で入力する。 ● 担当教員による個別面談を受け、研究の	● 担当教員間で教室内のチームを分担し、すべてのチームと順次面談を実施する。チームのおおよその研究計画を傾聴しながら、方向性がズレていないか個別に助言を行う。 ● スライドp.17の「リサーチクエスチョンの導出のポイント」を参照させ、特に「先行研究や事例から、そのリサーチクエスチョンに取り組む意義を見出せているか？」という観点を重点的に指導する。 ● 問いが単なる「調べ学習(答えがすぐに見つかる問い)」に留まっているチームには、言葉の定義の具体化(「いつ」「どこで」「だれが」等)や、より本質的な課題解決に繋がる「問い」への昇華を促す。

	方向性や計画の実現性について助言を仰ぎ、修正・補強を行う。	
2分	(5) 本時の振り返りと今後の見通し ● 本時の活動内容を振り返り、個人端末から『探究ノート』の活動記録欄に記入する。 ● 次回も本日の続きとして研究活動(計画書のブラッシュアップ等)を進めることを確認する。	● 『探究ノート』の記入が全員完了しているか確認する。 ● 次回も今回の続きとなる研究計画策定作業を行うことを告げ、本時のワークへの取り組みを肯定的に評価(講評)し、長期的な研究活動に向けた動機付けを行う。